



設定

ノンケ警察官(カントボーイ化) × カントボーイ専門調教販売師

18 禁小説です。

変態露出狂のカントボーイ(女性器をもつ男性)を捕まえた警察官八雲圭太が、その変態露出狂の主人である五条剛にカントボーイ化ウィルス被打れて、代わりの奴隷、販売用の商品にされていく……。

※♡表現多めの作品です。快楽調教メインで、SM 要素少なめです。

登場人物

八雲 圭太(やぐも けいた) 25 歳 警察官

行方不明の父の背中をおいかけ、警察官になった。正義感が強い。

五条 剛(ごじょう つよし) 40 歳 カントボーイ専門調教販売師

ウィルスで男を無理やりカントボーイにして、調教、販売している。

佐藤 学(さとう まなぶ) 45 歳 警察官

圭太の父の同期で、また、圭太の上司でもある。

引金

昼下がりの公園で、圭太はその男を取り押さえた。

子どもの笑い声と犬の鳴き声が混じる、あまりにも穏やかな時間帯だったからこそ、その異様さは際立っていた。圭太がたまたま通りかかったその公園で、男は男性に向けて自身の股間をさらしていた。

その股間に男性器は無く、女性が本来持つものがついていた。何万人の一人の確率で生まれるカントボーイ。また稀に病気でなるものもいるそうだ。そんなただでさえ「めずらしい」と人から際立ちやすい人が、何故そんなことを……。

手錠をかけられた瞬間、男は泣き出した。嗚咽のような声を漏らしながら、次の瞬間には、信じられないほど穏やかな笑みを浮かべている。涙と笑顔が同時に存在し、そこには狂気が存在した……。

身分を確認すると、かつて警察官だったことが分かる。圭太は一瞬、言葉を失った。なぜ、どうして……問いは喉元まで来て、結局飲み込むしかなかった。

そして、そんな圭太を木の影から見つめる男がいる。唇を強く噛みしめ、爪が手に食い込むほど拳を握りしめている。その視線は、圭太から一瞬たりとも離れなかった……。

署に戻ると、空気が一段と重くなったように感じる。

そして圭太が報告書を提出した直後、上司の佐藤に呼ばれた。扉を閉めた途端、机を手で叩く乾いた音が鳴った。

「よくもあんな騒ぎ起こしてくれたな」

低い声で佐藤は言う。

「手順通りです。現行犯……」

「手順？ 世間がどう見るか、考えたか？」

佐藤は椅子にもたれ、鼻で笑う。

「元警察官だと？ 面倒なのを引いたな、お前」

圭太は背筋を伸ばしたまま、視線を落とさずまっすぐに佐藤を見ている。まるで自分は間違っていないというように。佐藤はそれが気に入らないらしく、声を強めた。

「この書き方だと、世間が黙っちゃいないだろうが」

「事実を書きました」

「事実？ それをどう使うかが仕事だろ」

佐藤は立ち上がり、距離を詰める。

「若いからって、正義感で突っ走るな。いつか痛い目見るぞ」

圭太は次の言葉を見つけたが、結局飲み込んだ。

「……次はもっと賢くやれ」

佐藤は背を向け、追い払うように手を振る。

廊下に出ると、蛍光灯の白さが目に痛く感じる。圭太は深く息を吐いた。頭の片隅に、あの男の泣き笑いの顔が、まだ消えずに残っていた…………。

犯罪

あの露出男を捕まえてからは平穏な日々が続いていた。

今日は久しぶりに早上がりだったため同期と飲みに行き、上司の愚痴を言い合ったり、好きな女の子の話をしたりした。

あまりにも盛り上がり 3 次会まで行ってしまった圭太は、足がふらつき、まっすぐ歩くこともままならないでいる。

「やべえ、飲みすぎた……変なことして不祥事になったらまずいな……ははは」

その時ふと見上げるとそこにはこの間の公園があった。すでに暗くなっているというのに、誰かがあの露出男が立っていたトイレのあたりに立っている。圭太は吸い込まれるようにその人影に近づいて行った。

近づくにつれ、その陰だったものは形をあらわす。そして、そこには全裸で自身の女性器に太いバイブのようなものをさして乳首をいじっている“男”がいたのだ。その表情は恍惚としていて最高の快楽を得ているようだ……。

———！？

ドスッ——！

圭太が目をこすってその目の前のものを確認しようとしたまさにその瞬間、何者かに後頭部を強打され、圭太は意識を失った……。